

## G.eytianum (和名栄次丸) について

2007.11.30

島田壽男

*G.eytianum* は 1990 年ギムノ愛好会発行の「ギムノハンドブック」に No.49 として紹介されている。写真では、花が無いので、どのグループに属するのかわからないが、*G.megatae* の刺の弱いタイプに近い。一方メサ（種子番号 464.07, KK520, 写真 1）やピルツ（写真 2）で *G.pflanzii* var. *eytianum* として販売されているものは、外見から明らかに *G.pflanzii* の仲間であると思われる。しかし、ウーリッヒで、*G.pflanzii* v. *eytianum*（写真 3）



写真 1: *G.eytianum* Mesa464.07, KK520

として販売している物は、*G.pflanzii* の仲間ではなくて、*G.megate* の仲間である。私はこれが、かなり前から気になっていた。ただし、Mesa では *G.eytianum* は種子番号が *G.pflanzii* とは違うので、区別されていることは確かである。そして花の写真からは *G.pflanzii* 系としてよい。

最近、*G.eytianum* が最初に学術記載された、Martin Cardenas 氏の古い文献が偶然、手に入り、私の疑問に答えてくれるかもしれないと思い、その論文を読んだ。間違い

が生じた原因みたいなものが少し見えてきたので紹介したいと思う。Martin Cardenas 氏は、ボリビア人のカクタス研究家の一人で、Freidrich Ritter 氏が見つけたギムノカリキュームの名品、光琳玉の学名は彼に敬意を払って命名されている。彼は 1958 年に、ドイツのカクタス雑誌「Kakteen und andere Sukkulente(n)en (KuaS と略記される)」9 巻 1 号の 11 頁から 13 頁および 2 号の 21 頁から 27 頁に「ボリビアのギムノカリキューム属」で論文を発表した。

この中で、学術記載された新種の一つが *G.eytianum* である。M.Cardenas 氏は英語で投稿したので、別の方がドイツ語に翻訳して出版されている。

誤解を招く要因の一つは、*G.zegarrae*、*G.lagunillasense*、*G.riogradense*、*G.eytianum*、*G.marquezii* の順番で、これらを一つの論文の中で、一緒に学術記載している。*G.eytianum* を除けば、すべて *G.pflanzii* の仲間、*G.pflanzii* の仲間と誤解されても仕方が無い順番である。M.Cardenas 氏もそのように考えていたのかもしれないが、明言はされていない。ただ写真及び正確な花の描写および花の縦切断



写真 2: *G.pflanzii* v. *eytianum* Pilz より

図の詳細なスケッチが載っている。

花の咲いた個体の写真では、花は頭頂部近くから出ているが、稜やコブ隆起は、天賜玉というより、メガタエに近いように見る。花の切断図は、同じく載せられている他の種の同様のスケッチ比べて明確に違いが分かる。他の物は花筒部、(子房)が丸に近いが、***G.eytianum*** のみが縦長である。(写真 4 参照)



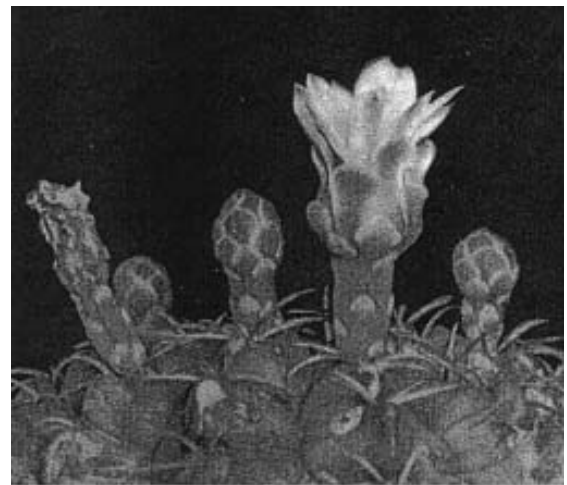
写真 3: ウーリッヒの ***G.pflanzii v. eytianum***

1960 年の KuaS 11 巻 3 号の 46 頁から 47 頁に再び、M.Cardenas 氏が、先の論文の補足として、***G.eytianum*** と ***G.marquezii*** に追加の情報を書き加えた。***G.eytianum*** は特に、結実したので、種子の詳細な情報を書いている。***G.marquezii*** は以前の号では、写真がぼけていたので、より鮮明なものに差し替えると言うだけのことであった。***G.eytianum*** 果実は円錐形から紡錘形状で、明らかに、球形の天賜玉系の果実は異なる。「種子は茶色で、表面に粒粒がある、大きさは 1 mm から 1.2 mm、球形、ハイラムは認識できない。」とある。この果実の描写から、天賜玉系との違いは、大きさが天賜玉系の種子は通常 0.5 mm に比べて大きいこと、そして、表面は普通な滑らかなのに比べて、粒粒があることである。***G.eytianum*** の種子の特徴は波晃竜や、メガタエ系の種子の特徴に合致する。このとき、***G.marquezii*** の写真の説明文は、間違って ***G.eytianum*** となっていた。本文を読めば、説明文は間違いであることは自明であるが、写真だけしか見なかった人には誤解を招いた可能性はある。

1959 年発行の Backeberg 氏の Die Cactaceae III のギムノカリキウム項では、Backeberg 氏は、発表間もなくで、彼の手元には実物は無かったと見え、Cardenas 氏の記載をそのまま、引用して、***G.pflanzii*** の仲間とところで、議論している。しかし Backeberg 氏は、「写真で見ると、この種はどちらかというところ、***G.monvillei*** を思い起こさせる。とりわけ、花は、雄蕊の色や花柱の色、長い子房が同時に記載された残りの物と逸脱している」とコメントしている。

その後 1971 年に、J.D.Donald 氏が、Natl. Cact. Succ. J. 26. 100 に M.Cardenas 氏の記載した種を、***G.pflanzii*** の変種及び異名同種として記載変更してしまった。***G.eytianum*** Cardenas は ***G.pflanzii*** Vaupel var. ***eytianum*** (Cardenas) Donald となった。ここから、天賜玉系の ***G.eytianum*** が世に出回る事になったと思われる。

その後、私と同じ疑問を持った人 (Anton Keisser 氏) がすでに、1981 年この問題について



***G.eytianum*** Card. KuaS 9(2) P25 (1958)

写真 4: Cardenas 氏の論文の ***G.eytianum***

の論文を KuaS32 巻 11 号、266 頁から 268 頁に書いていることが分かった。

論文の要旨は、先に説明したとおり、花の違い、種子の違いから、専門家なら、すぐに種の違いが分かるはずである、しかし M.Cardenas 氏が、*G.eytianum* 以外は *G.pflanzii* 系と一緒に記載した事、写真の説明文が間違っていた事が取り違えの原因となった。しかし、写真の説明文の間違ひは、後の KuaS で訂正されたそうである。さらに論文は、その後 *G.eytianum* がどのように取り扱われたかに言及し、Pazout 氏は全く言及しなかった。Schütz 氏は疑問符を付けて節 *saglionia* に分類した。Donald 氏は *G.pflanzii* の変種に組み入れた。Buxbaum 氏は正しく列 *Schickendantzianae* の中に組み入れたとしている。

Anton Keisser 氏は、論文を J.D.Donald 氏に送り、コメントを求めた。Donald 氏のコメントは、「自分はこの植物グループを採集家 Alfred Lau 氏からの資料を元に研究した。しかし種の決定は、不十分で Cardenas 氏の原学術記載とは比較できないだろう。英国のカクタス愛好家により誤りを指摘されていたが、組み合わせを取り消す事を怠っていた。」

Anton Keisser 氏は、「この論文は、間違った組み合わせの最初の文字による訂正となる。」と結んでいる。

1981 年に、既に結論が出ているにも拘らず、いまなお、*G.pflanzii* 系の *G.eytianum* が流通しているのは何故なのか。私なりに考えてみた。

*G.eytianum* の原産地は、M.Cardenas 氏によればボリビア、Cordillera 州、Santa Cruz 地区 Eyti の近くとなっている。Caipipendi から Ipati へ向う途中、高度 1200m。しかし地図で探しても Eyti は見つからず、Caipipendi や Ipati だけは見つかった。

他の *G.pflanzii* 系の原産地を、Cardenas 氏の記載等を元に調べると、*G.pflanzii* 系の分布はかなり広く、アルゼンチンやパラグアイにも見つかっている。一方列 *Schickendantzianae* の仲間アルゼンチンでは、コルドバ、サン・ジュアン、カタマルカ、ツクマンそしてサルタそしてパラグアイや南東ボリビアに広がっている。従って南東ボリビアでは分布が重なるように思われる。従って、これから類推される事は、Eyti の近くでも *G.pflanzii* 系が見つかっていて、それを Donald 氏に従って *G.pflanzii v. eytianum* とされ、そして流通したと考えられる。

しかし Donald 氏の *G.eytianum* は *G.pflanzii* Vaupel var. *eytianum* (Cardenas) Donald であり、原記載者は Cardenas 氏である。Cardenas 氏の *G.eytianum* はメガタエの仲間である事は明白で、実際に存在していても *G.pflanzii* 系に *G.eytianum* の名前は使えない。従ってこの種は sp 種である。もしこれが独立種なら、新たに学術記載し名前を与える必要がある。しかし誰も敢えてしないのは、種のレベルで無く、せいぜい、*G.zegarrae* あるいは *G.pflanzii* の品種程度と考えているからでは無いだろうか。